英雄の時代から暗黒の時代へ

渡辺　浩

A：新年おめでとうございます．昨年の約束で今日はギリシャOR史をきかせていただくつもりで来ました．

Ω：おめでとう．さっそくはじめることにしよう．OR史を人物本位で，つまり列伝体で話してみようというのだが，その前に一応ギリシャ史の時代区分をしておく必要がある．その前に地理的概念も必要だ．

§1.　ギリシャ史の時代区分

Ω：この前話した“ポントスのはてよりアトラスの海のかぎりまで”というアフロディテの領域宣言は，劇作品の中の話だから少し誇張があってもしかたがない．古典時代，つまり前5世紀のギリシャ人都市の地理的分布については，ギリシャ本土，エーゲ海全域はいうまでもなく，東はキュプロス，北は黒海南岸，しかし北岸にもイーピゲネイア悲劇で有名なタウリスがあった．西はイタリア半島の半分，シチリアの半分は，散在するギリシャ人都市の影響下にあった．一部はさらに西のサルデニヤ，コルシカの両島から，南仏のマルセイム（ギリシャ名はマッサリア）に及んで，カルタゴを本拠に西地中海を支配するフェニキア人の勢力圏と張り合っていた．

ギリシャ本土が歴史時代に入って，年代がはっきりしてくるのは前7世紀ころで，それ以後に建設された都市も多いが，大きく見れば以上の地域への進出は，それ以前にほぼ完了していた．

“光は東方より”で小アジア沿岸諸島のギリシャ都市は，本土より100年くらい早く歴史時代に入ったらしい．ホメーロスはじめ，初期の指導的文化人の多くは，こちらのほうから登場する．

以下世界史年表でも見ていくようなことになるのだが前6世紀のはじめソロンが出てアテナイは隆盛に向う．

500～479年はペルシャ戦争．この間にペルシャはギリシャに4回出兵し，撃退された．　479～431年はアテナイの全盛時代．　431～404年はデロス同盟を率いるアテナイとスパルタを盟主とするペロポネソス同盟との間に戦われたペロポネソス戦争の期間で，アテナイは敗北する．　404～356年は諸都市の覇権争奪時代．スパルタからテーベへと，しかしテーベも敗れる．　356～335年は対マケドニヤ抵抗の時代．覇権よりも共同してマケドニヤに抵抗することが重要になってきた．　335～301年マケドニヤ王国による支配の時代．この間アレクサンドロスの東征がなされた．　301～146年はヘレニズム時代．マケドニヤ，エジプト，シリヤの諸王国が，ギリシャ系王朝の下に，ギリシャ文化圏を形成する．　ギリシャ諸都市はやがて自由を回復するが，なお絶えずマケドニヤから圧迫を受ける．しかし146年ローマの属領となる．30年　エジプト王国が滅亡．地中海の全周域がローマの支配下に入る．

これが古代ギリシャ史の大体の時代区分なのだが，次に先史時代を考える必要がある．

A：いやもう前5世紀のORで充分ではありませんか？　考古学まで興味はもてません．

Ω：はやまってはいけない．日本人にとって前5世紀は開びゃく以前だが，メソポタミアやエジプトでは，B.C. 3,000年ころから歴史時代に入っている．前5世紀は人類文明史5,000年の中点でしかない．歴史時代に先だつ神話と英雄伝説の時代，といっても古典時代のギリシャ人にとっては歴史と同じ意味をもっていて，その伝承は彼らの思想と行動の根幹になっていた．有識者の子弟はホメーロスの2大長篇叙事詩「イリアス」と「オデュッセイア」を暗誦するよう教育された．武具や戦斗方法，戦術，戦略，戦士道だけでなく，政治的かけひき，雄弁，道徳，宗教，祭式，家政まで，あらゆることについてホメーロスから教訓を得ることができると考えていたし，ポリスでの政治の場や，他ポリスとの外交折衝の場でもホメーロスを引用することが，重要な決定因子になることがあった．これは現代日本人にとっての源平や戦国時代以上のものといっていいだろう．

A：でも歴史と伝承を混合するのは，話の信頼性をうたがわれてマイナスになりませんか？

§2.　ミュケーナイ時代

Ω：そういう心配をするのも健全なことだね．しかし

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

どちらが生産的かとなると，実は100年前に勝負がついている．ホメーロスを信じたシュリーマンのトロイ発掘(1871)を手はじめに，アガメムノンの居城ミュケーナイ，テイーリュンス，ピュロス，クレタのクノッソスと，つぎつぎに前15～11世紀の王宮，城市の遺跡が発掘された．

エーゲ海一帯に初期青銅器文明のはじまるのはB.C.3,000年ごろで，この変動はエジプトの第一王朝の成立と関係があるのではないかという人もいる．B.C.2,000年ころギリシャ本土に一つの大きな変動があり，これは通常“イオニア人の南下”と呼ばれている．イオニア人は古典時代にアテナイを本拠とし，また小アジア沿岸のイオニア諸島に都市を建てていた人種で，後者はすべてアテナイからの植民都市であるという．

やがてクレタ島にミノア文明の最盛期(1,800～1,400年ころ)が訪れる．1,600年ころからはギリシャ本土にクレタの影響を受けた文化が発展し，ミュケーナイ時代がはじまる．1,400年ころクレタ文化は――おそらく本土のギリシャ人によって――破壊され，ミノア文明は幕となる．ギリシャ本土では1,100年ころまで後期ミュケーナイ文化の繁栄が引き続く．

英雄伝説の時代がこの後期ミュケーナイ文化の時代，それも終わりに近いほうの時期に対応していることは，伝説の内容と発掘された城市との対応関係から疑問の余地がない．しかしこれらの栄光の時代も1,100年ころに大破壊とともに幕となり，ギリシャ地域全体が暗黒の時代に入る．伝承のほうでいうと，トロイ戦争は英雄時代の末期を飾るクライマックスで，その次の世代になると，諸王家の家系もほとんど不明になってしまう．

英雄の時代にとどめをさした大変動は通常はドーリス人の侵入によるものだという．これが鉄器時代のはじまりを意味するともいう．ドーリス人は古典時代のペロポネソス半島の主要部分であるスパルタやアルゴス，アテナイ北方のボイオテイア地方などの住民で，イオニア人とはやや違った方言をもっていた．

この暗黒の時代が300～400年ばかりも続いて，それから最初に述べた歴史時代の幕が静かに開いてゆく．

A：たとえ未開人の大挙侵入と大破壊があったとしても，そのための暗黒時代が300～400年も続くとは信じられませんね．

Ω：暗黒時代といっても，その間のことが何も伝わっていないという意味ではない．ホメーロスなどもこの時代の人だ．ただ年代がはっきりしない．史料批判の厳密さによってギリシャ歴史家の筆頭とされる，トウキュデイデースの説明を要約すると――

ギリシャの土地に人が定住するようになったのは比較的新しいことで，それ以前は人々の集団は，より強力な集団によって圧迫されたばあいには，簡単に土地を見捨てて別の土地に移っていった．トロイ戦争後も，トロイからのギリシャ勢の帰還が遅れたことによって，ほとんどすべてのポリスで内乱が起り，その内乱で国を追われた者たちが他の国を建てる，という事態がくりかえされた．トロイ陥落の80年後に，ドーリス人がヘラクレスの後裔たちとともにペロポネソス半島を占領し，その後やっと平和が定着し，住民が定住するようになってから，植民活動が開始された．

ということで，簡潔ながら一点のあいまい感も残さない．こうしてイオニア人たちのアテナイからイオニア諸島への，またドーリス人を主とするイタリア，シチリアへの植民がつぎつぎに行なわれたのは，この暗黒時代のことだったという．

A：暗黒の時代が海外大発展の時代だったというのは不思議ですね．

Ω：ゲルマン民族の大移動の時代が，ゲルマン人にとって栄光の時代として記録されたという話は聞いたことがないね．日本が海外にある程度の移民を送り出した時代が，後世から見て日本の繁栄時代だったと必ずしも感じられるかどうか．繁栄と窮乏の対比よりも，トウキュデイデースは高まった定住化傾向を，大規模植民活動のエネルギーとして暗示しているようだ．これは当然人口圧迫を意味するからね．

考古学的にはこの時代に生活水準ばかりでなく，文化，芸術の水準まで相当に低下したことは間違いないようだ．しかしこういう時代が300～400年も続くことは，また過去の栄光の時代の伝承を神話化するための絶好の環境を提供するものかもしれない．6世紀のライン河流域のゲルマンの部族の間で起こったことが，12世紀にニーベルンゲンの歌として神話化されたように，中世ヨーロッパとか，徳川時代とか閉鎖的な環境での長い熟成というような……．しかし現在の世界にそのような国，地域がないと断言することも容易ではなさそうだ．

(つづく)

(わたなべ・ひろし　筑波大学社会工学系)

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．